

環海異聞

所本
二

五

X

k 44

富士山文庫

X

290.9

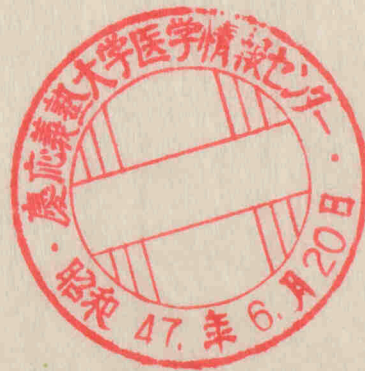
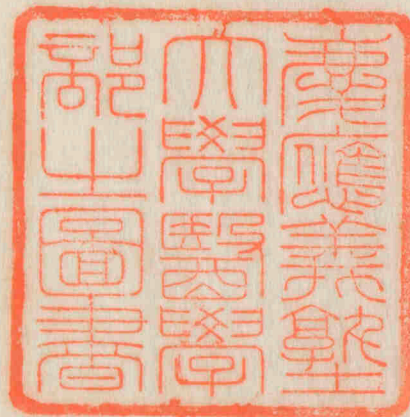
Ka

5

F⁵
カ-76

290.9
大

No. 2520
12 K 44



富士川文庫

168

林三又

環海異聞卷之五



寺觀道教第四 寺義宗

寺の事をゼンコフに老太史説といふ宗をとりて

ゼツコに老太史説と云ふ南無と指す寺あり右の中アリ

ヘライ老太史説とて人私尚書に記述の位持候

大寺をそと寺あつぽりといふ中堂の事サ波玉

サセにといふ現カミと指九ありといふサセに彼の人我邦蓋下の人

法より七人八分也十九ハ
今人十三人三人程也
け而中一の太きなりある大寺

とツボーリといふ所なりとそ寺ハ皆石造りの家化

るり各鐘樓あり何れも表口にあつてあるやすあ

向とあすく寺ハ凡て町くのまぐは建川 そ所川の
あまうり

あり あまうり 金佛 金銀
あ 又本佛は宿をぬくとも

あり あまうり 色々の佛一遍顔より縁ハ宿を

ぬり彩りくともあり佛あり ロウリクタラ 宿をぬくとも

年の佛もあつてやえぬあすねと寺の中寺

の名をゆきえへ あまうり セリヘンツケ、チヨトトボリ、

スツバーサン、トコイツ、ケレストウ、 凡て墓あり寺のま
ちう町より引越した

あまうり 寺ハ あまうり 寺ハ あまうり 寺ハ あまうり 寺ハ

い あまうり 寺ハ あまうり 寺ハ あまうり 寺ハ あまうり 寺ハ

イウシ、ステバス、セミヨシ、あまうり エゴロ、あまうり オニデライ あまうり

アシケレイ、コシノキノ、アソム、ビョートロ、オレキサシダス

あまうり アレキサシダラ あまうり の新造てあり 又女神のあまうりといふ

とものハマリア、アケリナ、バラカイヤ、マレウエヤス あまうり

マルヘイウナの新教あり

男也^ニは佛神の名を改^メての改^メは令^ノ々
令名^ノの改^メは令^ノ々
詳^ニす

と云へ

新^ニ教^ニは^ニ苦^ニ死^ニ去^リて^ニ後^ニを^ニ居^リる^ニ芒^ニ光^ニ

の教^ニは^ニ人^ニ指^シ或^ニ人^ニあり^ニを^ニ申^ニ九^ニ人^ニい^ニあ^ニて

福^ニれ^ニる^ニは^ニ今^ニも^ニさ^ニく^ニの^ニお^ニる^ニ乃^ニ教^ニは

遍^ニ額^ニは^ニ教^ニを^ニの^ニは^ニ是^ニを^ニ佛^ニと^ニス^ニウ^ニイ^ニト^ニイ

「チヨロウ五井カ」といふ 光^ニ曰^ニス^ニウ^ニイ^ニト^ニイ^ニハ死人といふ

の^ニと^ニそ そ^ニ名^ニ朽^ニ枯^ニモ^ニい^ニつ^ニモ
花^ニ咲^ニとい^ニふ^ニか^ニや

世國中一宗ありてお流るゝ但るゝと云ふあり

またなり町に教り乃檀中あり

町の名もそ檀那寺の名を稱してふ

は町の名はるに教りるんや

世國中へ生れあゝそあをつゝを始めゝこま

婦の縁組死葬系社のり考ゝもの裁判は任

する所なり 和尚といふ所なき者も平人と同しく
惣髪なり 但し髮を剃るをすくむアリハイ大誓
の年ハ素常肉食なり

肉食とハ牛羊豚等のるゝ食をす 唯麦餅
用ゐるハ比方なりといふ精進日なり

アリハイハ獣食等の肉食を食せず 唯麦餅
雑菜乃となり 但し牛乳ハ食ふなり

オロシイアリといふ牛乳男女老子の時より用

て生育するゝ處ニ清浄も用ゆるなりと

凡ゆる育子の節ニ詳なり

を清浄とす 穢なり 皆中より 格別秘藏

の人王命を授けり アリハイといふところニ毎

ちて素常れどもともめす 実子を以て継ぐるハ

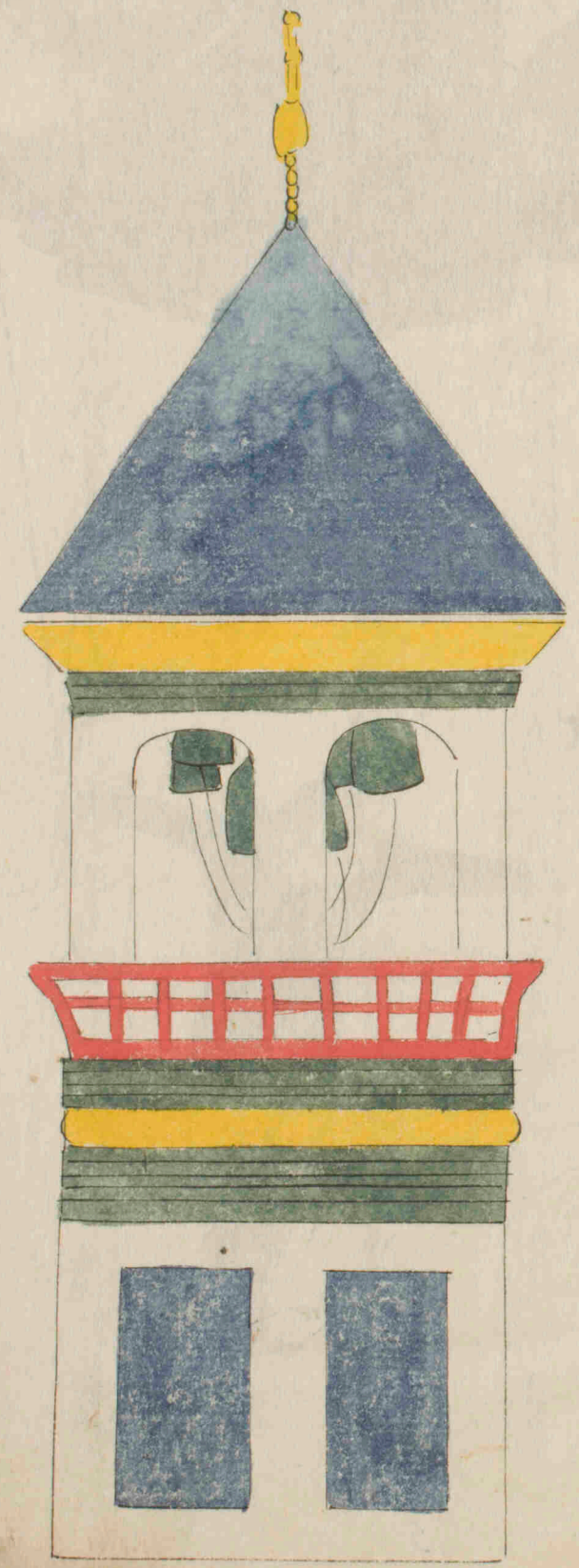
何れす 丈夫和尚より人柄を以て味して実

子なりとも實子なりともまゝに地のちなりとも継ぐ

せるなり 衣服ハ肉を食ふを忌む 尚神をたふす

とお島に鐘を始り、その鐘の終りにはお島に
 なり、毎朝太い鐘の音で、お島に知らせる
 まう。——と、曉の音を聞き、お島に知らせる
 慢有るなり。

鐘樓図





僧侶共々あゝ以神を祀むふたりの大指食指

中指乃三ツのえきと物をしるむあゝ合せえし

額にあゝ次は後にあゝまゝうたふ肩より

よりけはあゝ肩より十文字形をうすくあゝあゝ

けあゝあゝあゝ合せあゝ群むと同一くあゝあゝ

漆縄の文は何といふ一両の角あゝあゝあゝあゝ

けあゝあゝナムアミタブ〜とあゝ唱あゝあゝあゝあゝ

者の人〜あゝあゝコスボセ〜こボミナに〜あゝあゝ

出れ俗人

樽下の者幸へ糸詣するハ之度のおめある時

朝も夕も
曉も暮も
行くや
来や
あはれ

たすのたふある程の縁忌震目して自分

の位へ
至るを考へ
る
其勅ある
時刻より

るる組織の定めたる者訓等を讀みしるも強強

ある制限をきく

途中より
和尙と交りある所
に、毫くも

和尙の来りてを待川 和尙何う唱へて

自わの手をて人の手にまのせるに其人歸ち和

尚のちより口をつくるはくしくそ辱るゝと

ても斯かるなり

寺院之圖

寺院の造築悉く一古庵を經營せる門外の権
根源客木物語せる石前後編として受えり
家藏和葉銅板画は政通^{エウロッパ}巴地方の古塔をあらわ
す其のひしひしと見せしめあすは太元はあのか
りりと云うてその風景の中を名畧しあを
得れりるたのや一見そのニアの寺院をさ
にせるものゝあすといへとも彼地を臨寺
製造の大畧や知るゝよりぬへ

寺より離僧ともいふ處を者として宿より祇
まゝに續進する事もあり

一月といふべき月をイノワリといふを元目といふ
處より目と家々一後編ありそ二目より七目十
九日のうち中一中後之中後進潔斎をあす
るりそ中九日あけする初の日より七日のちハ
國中太極あり
二月中旬
あれをケレストゼンと
いふ所ハ男如松のあむり何れをもせず

の人〜ハおまひは漆ノ卵をぬかすこれハ卵の
殻のま〜サ糠本を煮つけて色を青〜おれり
彼方より卵を獲りケレストス、オス、ケニーニと
いハけ方よりハイステニ、オス、ケレーニと云て
又卵をつま〜五ノ口と口を合もける様か
りよす〜るより〜着てサ猿の居〜てあ〜但
同家方乃卵の煮〜ハ決〜せぬるなりこれ同家
お聲〜ぬサ卵とゆゆるれりケレスト、ゼンと云る

佛祖の毎活獲せせる目といふとそ衣の途中
りてヤセ〜もなきよりいハ佛祖の毎活同
お聲〜るといふ氣味とサ挨拶のまハ獲は活
同家なるといふ獲のりとは由毎七目乃ハ
奇〜ハハ種をサ卵を〜絶るれ〜ハ卵ト人の
おいふも〜ぬ程より五粒までいろ〜煮れ後
式大造る事と唱〜及〜り田舎より卵の煮
り〜煮〜るやその卵のりあるま〜をばるタハ

右の取の明るゝす夜の外より、曉より、
都合部十に附るゝす

け種堂の

上層は
ウエダン

大時計ありこれより合

時鐘をあるゝすときけり

旧時計は
ヒトケイ

奉引の役所より一所あり又市中

商店のりよそくありく、時鐘をこれ

より合するゝ毎時がくも遠くありと云

曉卯ノ刻

ユツ

五ツ辰

ユツ セストイ

セツ セツモイ

ハツ オシモイ

五ツ

ヒツ

四ツ

九ツ ゼノーイ

ナフ ゼシヤトイ

ナオジナツサイ

九ツ

カツ

ハツ

十二 シユアナツサイ

一ツベオーチャースニツドリチャース

ハツ

セツ

セツ

二ツ テレチャース

三ツ チャライレヤス

あッビヤーナ

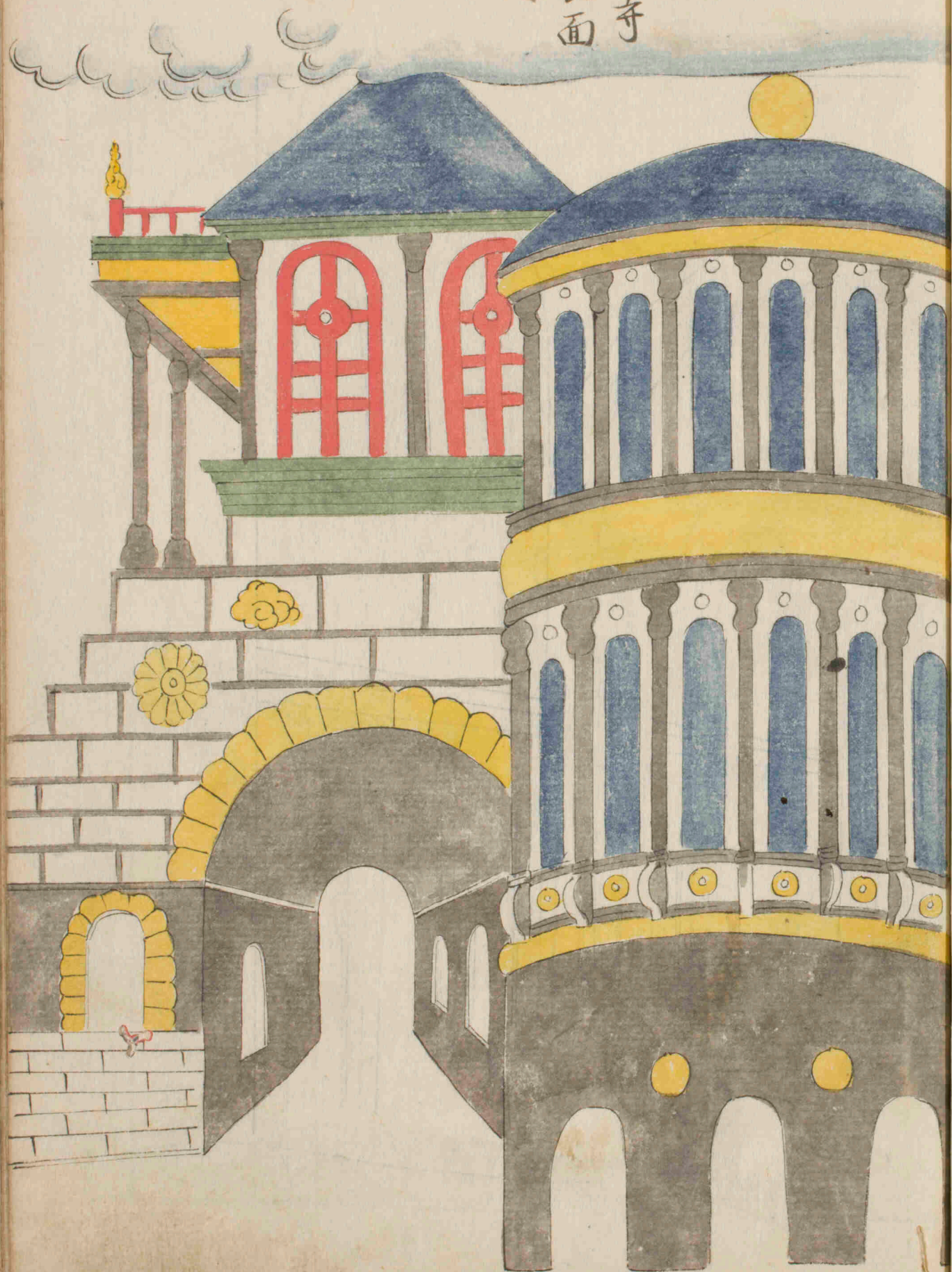
チャース

六ツ

六ツ セストイチャース

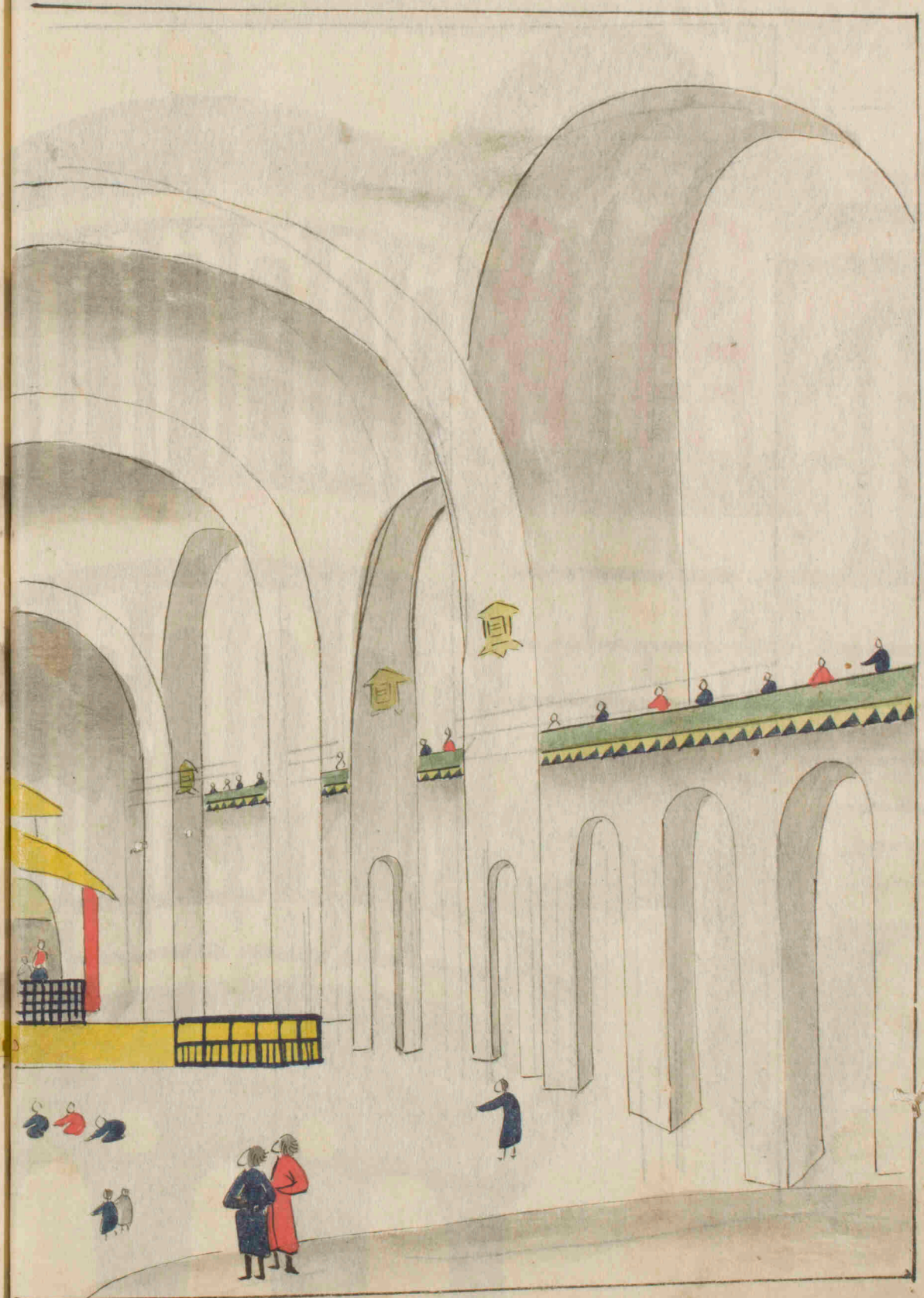
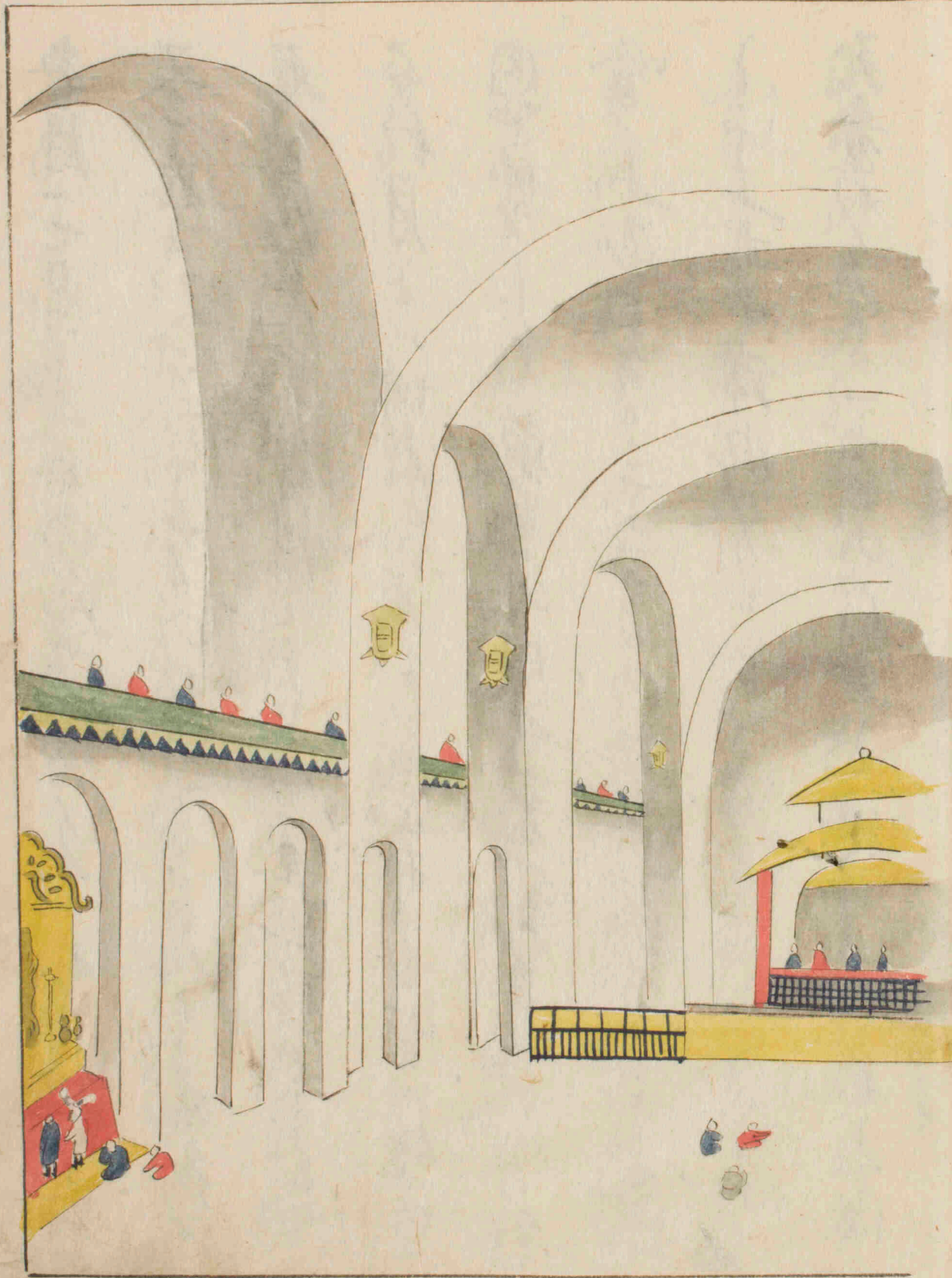
「チャース」ハ時といふ

大寺
表面
図



一より十二までの教屋のうへまで順へて
 ことゝ
 教屋の頭本郡は裁す

Handwritten notes in cursive Japanese (kuzushiji) are visible in the background of the right page, including phrases like "十二の教屋" and "教屋の頭本郡".



毎月一七日よりその日のあせうよりあり八日めより
又を始よりその日の初めする日ハその前夜も
身を清免する時より何れも加減をする之
これ月よりハ何れよりあるは日毎の
肉を焼くとして魚鳥の肉を煮菜は新麦飯より
喰ふとありその二日のあせうをすしきりせし
といふ事な詳なり

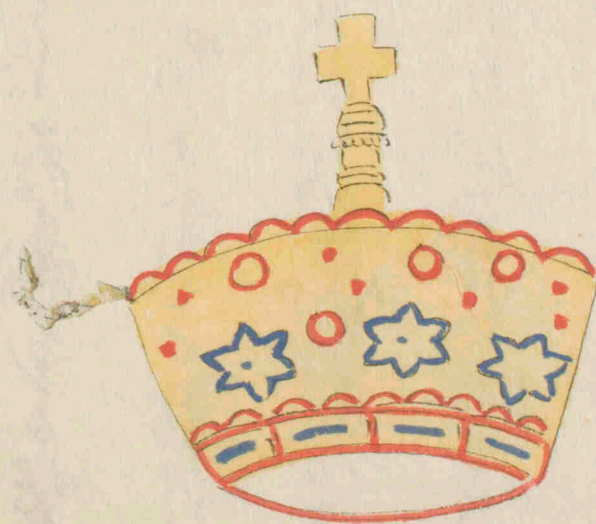
死者ありて一七日の間と
禊ぎ家には

以所飲文

け紫の目太和尙ハあゝ花唐ある装束と云ふ
 玉より悲願の冠帽を戴き勅行と云ふなり
 を禮服極々一災々々且装束のつあらは法武
 もあるなりと云ふ寺の子屋より別人云々人々
 を忌けるゝぬるけ早ねの鐘をあゝすとお島に
 中寺へ行列と云々〜ぬるけ早ねの鐘をあゝすとお島に
 一りゝ人々の話と云々九日のるゝ以祖死
 あひ一問と云々四日めは後生〜を祝ふる云々

アリヘリイ 大和尙帝より給ふ冠帽図

上段ハ金の十字形 帽の上面金銀珠玉
を綴む



轉車の斗は人を乗せし旋轉する戲の具

對向の目を注ぎて是を仰り其の漂客

をよふたりたるは正なる形を給ふなり

いひはふりたるは正なる形



産育及赤子命名所

産婦育子並に初生児を置く

凡そ婦人が産まねば産後病目よりお生を

抱き一七日の間ハ朝夕毎度入湯す浴湯ハ

かゝ風呂なり強く寒ぬるゝ不持也

撫むにけ一事を憂懐うるやまゝく之程是

を詰問^{ナシリ}ふと遠れ一彼を全神の極子大ひに

呉るれ風俗るれん^{スセ}の素性も遠く

産婦とも初生うもさしめれるるもあは
しやといふ後光太史はさきうてけ事を問ふ
られそふ^{イデカ}審一吉波金端審の目これぞ
えぞせん彼地の風呂屋ハ本屋をさすれ
て別々建川下紙の家より産屋一ち乃
ハハ彼風呂屋正お片もさるものありあゝハ
是ぞとん〜風呂屋へ入るなりと思ひたりと
人ハ固より産屋有るなりなり〜といへり
^{ウフヤ}

るりやき根子なりあゝ〜紙着の妻女極ハ産後
胃もれ〜食る極の世話あともさるるや

一 ^{オット}文産穢といふなり但婦人そ七目けるを
寺へ行く事をさめ〜なり

一 産婦あゝ〜自身の乳汁吸くあゝ〜極あゝ〜
中腹もる牛乳を小児は吸くむ面〜の衆は
牛を畜ひあゝ〜乳汁を忌はあゝ〜たわ牛ゆ
又自家は畜ひあゝ〜者ハ産物を求めありて

用ゆを哺^{ナカ}せうゝハ牛角のを^{ナカ}とつて角とれ

せんきのふはハ屠牛の乳頭^{コロシタルウシ}とありきゝそのまう

すけゝこれと小児の口含ませ角巾のとうろ

の廣き口より牛乳を注ぎ入る小児をまげたる

牛乳乳と口へつけ吸ふゝ生牛^{イキ}よりの志あり

ゝていゝまうゝと吸せ吸へゝゝゝのあゝめて吸ま

時うゝ児の啼泣をゝゝ牛乳をゝあゝゝゝ時

たゝゝハ母の乳をもほれゝゝ旅^{イリ}送^{イリ}おゝゝゝ乳子

ゝゝゝ小児志やぬり^{ナカ}形ゝゝゝ

按^{ナカ}ゝけ育子乳哺の法を録ゝゝハ婦人

子を産ゝゝ乳汁あるハ自然の及理畜乳

とゝゝゝも同ゝゝゝ皆造化の成りなり

ゝゝゝ偶^{ナカ}ゝゝ乳汁あるゝ乳婦女ハ牛乳

ゝゝゝも何れもゝ小児育をへゝゝオロミアの婦

人ゝゝゝゝゝ乳汁児を産みゝゝゝゝゝ

何れも産みゝゝ乳汁あるゝゝ同ゝゝ中風

頭よりまきくハ周より為くさるなり

光太史ハ王邦も暫く在らせし者あれハ

程き記しむとあてけしる銀の事ハ何ん

といふ漂客の物語とあるを録するもの

一 物語國中一字の者あるもあれハ男女老若其

小児ハ名を命するハ檀那寺より進み交り

定むる寺くハ極りてある本寺の祖佛とも

いふべき遍部ある所の佛名を讀ひく名取

はく也七夜より以後より信仰し自く奉む所の

佛の縁起の日と考へ歳日よりも寺へはまゆ

む別限ハ季節の有時とさくハ新くハ我父を

頼むものたる所は是を實親史婦もなほさく

はく和尚お連ひ傍にありて是を度脱して桶の

長^{タケ}飯^イき^キと云ねのおは冷水と浴へ玉 あふは銀なり
これとともてた

扱ふべき物とて
あふよりおるり 是因小児を裸より入る小児乃

其身ハ物をさきけりハとを扱ひてある扱

世よりわづる母親とすうたる人白き布帛を
こし——新き扉座は是より包む是より親より信
る物——て着衣するといふは持て居ぬ包とする
児をそふとすうたる人更なる抱へ和尚を目乃
縁よりあつたりたる佛の匾額^{カリ}を推ひあり其佛
像のもの衣へ小児の口を付させるなりぬを仕う
す——後かねて仰りたるケレとといふ本尊の像
と縁する物と小児のありはかきすうこれと

定例ありとそけ式は今もれある如く身を淨
め——先和尚中々——佛の弟子とあり——あもさ
けりりそ案つよ入り——をばゆるれり

其目より佛ニコライありは是を名取つぎ
そりこふ父する人の名取の佛名を用ひてに
イナといふを添ふあり姓ハそりこは稱して是ハ
せし愛する事れ——ことへハ父ハバイトロゆれり
居今授り——ニコライと名取あり——ニコライ

ハイトロイチと尾を削——移するなりちいさく
姓ハ父祖の姓を用ゆたとへハコロラゲレといふ姓あ
れハニコライハイトルイチコロラゲレと連ね移る
なり一字を削のきあるくといふまうりトそ
庶民あるをい例なり我父をすれハ佛名を
名取つこの年その父の名ハそ父の名を替る
まてなりむそ姓を用ゆる事も我父はほや又大
人より他家の者け家つるへなる時ハ例を用

ひ寺よりとりて改名す但大人すれハ寺は有合乃
活桶ハ小サるねハ切桶ある新くは作る——衣
履その中も皆多親より用ゐる——あるなり
凡そ我父ハあふ子を能けありとてその世を
も継るといなり

一 小児ハ多クハ番^{フコ}ともいふ名を扱へ金銀くま
^{イミサ}育するくそ等ハあるく——と仰り是より厚き
裁巾^キを附け袴のき富^ヤのき——袋のき——

その中へ入れたるれりおに隅に紐をつけしけ
内へ小児を入れしとてはけり

一 小児をハハはたはたせしめしとてしつゝ
番の内へ入るも内へハ入る物をおきし内は
既のちろくうねとせしめしとて物を置く
面々ちのちとつゝおにけり物をおきし内は
つゝろりおを程と考へて牛乳をすめし内は
乳母を抱しけ乳母も乳哺のちあはれし小児

取扱の守りなり史記年以の如くお静し

て欠害れるものを撰しけりおハ小児二使乃

取扱目包こしきれのまきかへ又附湯と浴

せし牛乳をすめぬとありて秘せし

等一切育てしものはおりし夜は

部するすゝめ抱き寝するといふは

銭の者ハそ母るもの已るも業ある

夜は自身の在る前ふこつておを無試の

トのちよきと指しおれり、所をぬき入れぬ
こと勅——小児をなす——福をせしむるはあは
しくハは業をう——所をぬき入れぬを考へて牛
乳を飲つる也——啼きぬきぬき——牛乳を
るは合する所ハ自身のおぬ乳をも飲ふらせる所
ありきを見起す——タチアルおぬ乳をうて育て六
七歳ものなりてハ父母の傍にゐる——おの森るに
とくあり

按はちよ載る小児を養育する番の如き何れ
のちよも有るや、和業も何れ——ウイ——グと
あるは、おれの和業人、後列して、井細子、後
て、おれに、おれ——と、おれをうける事ありき
我邦はハ業ワラ蘭イグサ等とて、おれ、和業の民にハ
イジコと、おれ、おれとてハエチコ、英、法、等、ハ
イヅミ又エミシと、おれ、和業とてハオサヲケ、ハ
おれ、おれ、ハフゴといふ——おれ、おれのちよ有る

魯西亜の囀り所未々詳りあるす唐山は揺
車揺籃兒版等の名あり

明草堂菊坡叢語曰古人製小兒睡車曰揺
車以兒揺則睡故也一名揺籃

乾隆御製文集兒版詩註小兒生在襁褓中令
卧飯上掌束其兩臂倚禮庖壁間啼則揺
之徒居則懸駝裝之復

婚禮第六

婚嫁の事をスリソビといふは縁組の定免もさ
らしく極められり因ハ嫁物^{ナカクナ}うちて縁談あり

轉き者ハ兄事つれるとて孫女とて何

るくろ何り中より此のふるあると云ゆ

内納極り後日を撰ひて寺へ入玉壻方名

カ那門親類を悉くこの者等縁女を連れさる親

り臺りの門寺乃執事ある制限一同なり也

婿婦^{ヨソ}新服を乞ふる意よくあらば婿の衣履
といふハ解中人以ハ從是なる車を裁せ
るるは牽りすそのハ馬は譲りて仍きゆり
するまて人相寄へ到れハ友人たはオケ^{花豆}ソリ乃
紫き物を冠らしむ私尚婿に向ひ係^{ナニテ}集る女
子と妻女とある物はあるよりお遠るきやと
何ハ男給のとうくといふ又女子はとハ汝集を
夫^{オット}は定むべしとける遠愛あるやといふ又女子

命の如くと誓ふは財私尚唱へて其日の
縁をとりたる仏像の匾^カ額を携ひある女
人は十文字は飾りどしそ佛の手の下へ婿の
口をささせお厭う又婦人もそあくるひ
あひて後男の指し稱と女の指環^{ユヒカ子}とより久
しめさするなり

男女平生たの無名指^{ソスリユヒ}は指環と字の事
彼地それ風俗よりそ人ハ金銀玉石を珍

めづるもの残人ハ志疎赤銅角^ツとめて
も作るる希^レといふるめ——

お婦た^もを^レ向^レ指^おす^レ堀^を孝^のこ^へ已^ハ
う^も孝^をのせ又^久——あむくれ^ハ婦又^{その}
孝^へ自身^の孝^をのせる^れり而^{して}後^堀婦^の
た^のを^レ抱^り和^尚堀^のを^レとり^纏文^を解^り
てある^をを^レたり^出り^は三^遍巡^りて^薄て^孝へ^酒代^は
はき^男飲^さ——^とあ^るを^レす^女これ^をの^る男^は

孝^{して}細^むそれ^{より}又^先の^やたり^出り^は三^遍
——^の婦^う冠^りもの^を脱^き何^れも^はれ^たち
堀^の宿^は到^るれ^りこれ^和尚^中立^てて^丈婦^の
縁^組を^佛又^誓ふ^と兄^面中^と下^たは^孝
或^りり^夜は^初縁^組婚^嫁も^るる^ハあ^るれ^ハ女^は
初^のよう^にた^る夜^妻を^離縁^{する}事^何れ^男^ハ
生涯^女を^持り^る女^も男^を嫌^ひ離^れ
も^一生^あま^はえ^ゆ事^何れ^すと^{なり}但^男女^は

よ死別ハ男も女も三度までハ毎縁しても
苦——うすといふ

婿の家より座中ハ食盤を置き居りよ人
殺ハ意——掃子と共ハとさく寺より歸り
来るをまじし新蔵ハ後素をひひ——とき
た平務ハものも酒ハ招うれおきてそ式をえ
し——そ食盤のそ客の向ハ秘ハのそ血
を枚と食記又小カのこそそをを飯へ至ん

む盃酒壺を佛ハお名寺より帰れハ先ハ
と座ハ婿座とよりそた膳ハ掃それハ嫁
の妻ハいふき者座中そた右の下座ハ男
女それハ座中又婿婦たよそ門縁ある
者あ人立合院人といふ私成者ありて列座
するよりこれをス——チイテ止といふ是ハ佛ハ
誓ハ縁組物定せ——との院授人也右の
院人我者より佛像を画きける匾額

携ひいづるる初志の食盤とよま麦餅クレツ
一塊を居へる餅の上れた右と中央は塩成
惟くとりとく之焼人部とあるは捧けて
盤の前より立ッ婦を前よりある焼人部を
持つ婦の面部の前へあて十文字の婦り
出す婦の焼人の踏掛へするあるのよ
部をあて一礼も事終りて遍部を焼
る家の^{タカミ}る^{タカミ}ようけ垂之添へ後盤と乃

麦餅をも微スもその佛像への供物乃心
くやこの餅は焼く動く供物と為すと
すり焼く是へすけ例式は緑女他は事
成ある所はけスーキイテ止所は是を祝
の席より重き礼を以て供物と爲す
縁組あり既して席の仏の部は自家
ありあるへ一それと焼物の爲す寺へ
かゝり吾の焼礼の席も列取り立合焼

人ともろり——と五割く存けり。その新嘉
後妻ハゴロニニチ 町年寄ハ内縁ありて
け院人ハ五——新嘉宅へありけ定例を
なせ——と

お名々度ハ物々先ッ盤上。お名々下の食
おとス——テイテレ 院人 庖丁 兼おととり
切らち——婿ハ物々婿見を院者の兼ハ
ある血ハおとけ 配りまより婿ハおと方の兼ハ

ある血ハ自——海とけ飲——おと名へ礼
をらす院者も物々更てのおとけり 名々
飲食——婿ハ物々婿ハ毎客物々の
兼ハ金銀羽の貨物と名々——と兼或
と金或ハ銀羽と物々も多ハありとけハ
外限——おとする事としてけ日の院者ハおせ
と名々酒食より物々おと兼ハ盤とひく
なり院者物々——と名々人としてけけ時婿方

の男女コノナノと歌ひあすけりけしものうら
りる目メもたれ祝言イハヒコト名うともたれ悦ユキひあられ
君も我おもそる安楽と存タラシひ樂ガク一長
生ナミ方毒ドクの家毎ノカドモと榮へ末ハ極楽浄土へお
とむきあへといふねるるるこそ長生といふ
るをドウケウエーユ正といふるはさへより
けあふ〜引とあられは客立とてれハ座
よ少き卓盤シヤハシう又ハ三足の小盤コハシおをまへあき

何をもへ榮サカ榮サカを初む名二三碗をのきて
屏フシもちこれをもひき〜そねへブレにといふおを
ちもそ六葉ロクエフ——葉の口へ〜落きと酒を
かへ砂糖を入〜るものへあつぬ〜よりて飲
せらる〜おるふき
ゆみのあきあれ地をの落りよそ名高へ
屏〜なり一座動イサドウお人お後より二度も三度
あひ〜客入キヤクイはつて
福世のまゝ後ハ新
よりた手とり
一祝儀の宴會ウケギノウタヘをより衆ムラ入る但〜婚姻コンインの

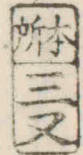
礼式は多忙なかり少く二舎よりい客へとて
ますのこけ宴食三日も冒も所り大衆
なれぬ数日の客ある趣なり音曲の催し
有る宴食を盛るなりおれ多く一夜分て
衆衆の宴法種あり下はこゆるそ宴の世
席は金せしうふなりそ世を辨振る
りや新婦るゝ威は堪すゝ涙を流
すをもそゝり

又日を撰てゝおは新婦の家へもゆき婿の
方へ舟乗りゝをも招き餐し祝ふなり
多者のおれは夜は客をゝて祝ふとて
婿の料理献立は人々分限ありて大
小菜殺も遠く中々す也ゝもさひ見
せられ

一彼を五六十歳はなり姑々妻を有つ者
多しこれ風俗も志ある人ハ何れ若き

時よりむけ程一川の如きうてなるよ
ひ運へるものと夢中一りの成就せる内
た客を求めてハ自由な働きとる
あそそ支度男と千歳はなりぬ十と
より十七八とより十年の遠ひ一

此の所の所り



環海異夢集五巻

大日本

中野しち

いづれいづれ

あまふは

あまふは

